

忘れられない寅さんと健さんの立ち姿

女優さんの中で大好きなのが、何回もレポートしている吉永小百合さん、そして倍賞千恵子さんだ。写真は『文藝春秋』10月号。つい抜粋して紹介したくなった。まずは倍賞さんのプロフィール。

1941年、東京都で生まれた倍賞千恵子(82)。松竹音楽舞踏学校を主席で卒業し、松竹歌劇団(SKD)に入団した。62年に『下町の太陽』で日本レコード大賞を受賞し、山田洋次監督の同名の映画に主演。以降「庶民派」女優として山田作品に欠かせない存在となる。69年からは渥美清演じる車寅次郎の妹・さくら役で『男はつらいよ』に出演。これまで170本以上の映画に出演してきたが、その約3分の1の作品で渥美と共演している。

渥美さんはスクリーンに映っているまんま、周囲に笑いの絶えない方でした。渥美さんは勉強家でもありました。本をよく読み、他の俳優さんの映画や舞台もチケットを取って、頻繁に見に行っていた。帽子をかぶり、サングラスをかけてマスクして変装するのですが、やっぱりバレてしまう(笑)。舞台からでも「渥美さんが来てる」と分かったようです。寅さんとさくらという役を超えて、本当に兄のように優しくして貰いました。これまで共演してきた俳優の方々の中で、立ち姿が美しいと思った方は3人います。渥美さん、『男はつらいよ』で御前様を演じた笠智衆さん、そして高倉健さんです。山田さんはよく「いい役者は贅肉が無い」とおっしゃいます。身体のことではありません。演技に自信のない俳優ほど小芝居をしたがる。それを「贅肉」と呼んでいるのです。3人に共通しているのは「贅肉」の無い芝居をしていたことなんですネ。

渥美さんが肩に上着を掛けて、裸足に雪駄で鞆を提げて「ただいま」と帰ってくる。その立ち姿には無駄がなく、美しい。笠さんの年輪を重ねた演技は、余計なものは省かれており、御前様の格好をして、帝釈天の門に立っているだけで格好いい。健さんもそう。私が初めて共演したのは山田さんの監督作『幸福の黄色いハンカチ』(77年)でした。渥美さんとは格好良さの質が違うのですが、お二人の立ち姿が似ていると感じました。目の大きさは全然違うけれど(笑)。

チーム一体となって作品を作る。この考えの原点は『男はつらいよ』。お茶の間でさくらや博さん、おいちゃん、おばちゃん、タコ社長が世間話をしているところに、寅さんが旅先から戻ってきて土産話をする撮影の時のこと。山田さんがこうおっしゃったのです。「茶の間のシーンは、みんなでコーラスを歌っているところへ、寅さんが帰ってきて一人でアリアを歌う場面。君たちはそれに、ハーモニーを付けるんです」寅さんが極上のアリアを歌い、私たちはそれを最大限活かすように歌う。そうすることで、二重唱、三重唱にもなって、場面が一層豊かになっていくんですネ。これからも『男はつらいよ』仕込みの精神で、作品にもコンサートにも関わっていきたいと思います。

(2023年9月24日)

